

FD推進委員会が推奨する授業公開科目一覧

科目名	授業形態	開講クラス	担当者名	曜時	参観が望ましい日程	受講者	教室	科目目的	到達目標	授業方法	参観のポイント
日本近代文学概論	講義	大日1B	三品 理絵	土2	特になし	68名	L1-805	日本近代文学を学習・研究するのに必要な知識を習得し、日本文学研究の様々な観点を学ぶ。また本科目は、中高教科国語、高校教科書道を教授するに足る基礎的知識および技能等を修得し、教職実践力と関連づけて理解することを一目的とする。	日本近代文学について、大学での学習・研究に必要な視点を獲得している。教職課程履修学生は、学修内容を当該の中高教科内容および教材に関連づけて主体的に探求する。	講義形式。各回の内容に沿ったプリントを配布し、教科書テキスト本文とともに、ときに音読を挟みつつ、解説・紹介をしていく。音読は、学生への指名あり。事前に配布する予習用コメント用紙に、その回扱う作品への疑問点や感想を記入し、持参する。講義のあと、フリートークタイムを挟んで、でてきた意見や自身の疑問点、解釈などを当該回用コメント用紙に記入し、予習用と併せて提出して貰う。	
グローバル化と日本A	演習	大英3S	N. J. ルドルフ	水2	特になし	18名	MM-306	The purpose of this course is to equip students to examine two different approaches to conceptualizing identity- "inside" and "outside," and "us" and "them" in Japan. Drawing upon these two approaches, students will then explore how "globalization" has been and is being conceptualized and approached within Japanese society.	This content-based course, in concert with other upper-level courses within the ACE program, is intended to equip students with linguistic, socio-cultural and academic knowledge that will prepare them for glocal (local and global) interaction, whether personal or professional in nature. The course contextualizes theoretical and practical debates relating to identity and globalization, and therefore pays particular attention to Japan, East Asia and other linguistic and cultural discourses and peoples implicated in Japan's ongoing negotiation of its nature and place in the global community.	The instructor will cultivate a classroom environment that encourages students to engage and interact with each other and the teacher. The instructor will provide course materials that connect with students' learning needs and personal and professional goals for tertiary study. The course will equip students both to actively pursue linguistic and socio-cultural knowledge pertinent to their lives and future pursuits, and to contribute to enriching the learning experience of their classmates.	英語によるコンテンツベースの授業をいかに行うか
生活科指導法	講義	大教3A	酒井 達哉	火2	7月11日	44名	SE-601	小学校生活科教育の理論の理解と模擬授業等の体験的活動を通して、小学校教師としての資質・能力の基礎を養う。	(1) 小学校生活科教育の目標・内容・方法・評価について理解する。 (2) 小学校生活科の授業を計画・実施することができる。	模擬授業 双方向授業 PBL	模擬授業を見て、グループごとに評価及び改善点について、ディスカッションを行い、よりよい授業作りについて学び合います。
対人関係の心理学	講義	短心1AB	竹中 一平	金3	6月30日を 除く4日間	94名	S-47	私たちの日々の人間関係の重要な部分を構成する人と人との関わりに関する心理学的メカニズムを学ぶ。	人類の繁栄の礎となった「人間関係の設計図」について理解し、その理解を基に、社会に貢献できる人間としての志を獲得する。	各回の授業は、前半で基礎的知識を学び(講義形式)、後半で学んだ知識の内容を応用するための作業を行う(演習形式)。具体的には、ワークシートを用いて個人で考えたり、グループワークによって他の受講者と意見交換をしたりする形式を予定している。 また、受講者の理解を促進し、学習成果を確認するために、講義中に3回小テストを課す。小テストを受けられなかった者や小テストの低得点者、希望者を対象に、授業時間外に取り組むレポートを課す。	若手の新任教員がわかりやすく講義する授業。時間外学習の工夫が授業で活かされているかを見てもらいたい。
スポーツ経営管理学	講義	新健2ABCD	穂原 寿織	水3	7月12日	170名	MM-723	現代のスポーツにおける環境は、地域のスポーツをはじめとし非常に多様化された組織の集まりとなっている。将来、スポーツ指導者という立場でその多様化されたスポーツ現場に対応する能力の一つとして、経営学的なものの考え方をもてるようにすることがねらいである。 また、本科目は、中高教科保健体育を教授するに足る基礎的知識および技能等を修得し、教職実践力と関連づけて理解することを一目的とする。	科目修得時には、スポーツ経営について論理的説明が可能となるよう、スポーツ経営の基礎を身につけることを目標とする。 教職課程履修学生は、学修内容を当該の中高教科内容および教材に関連づけて主体的に探求する。	板書、パワーポイントによる説明。	集中力が切れない為に、ケーススタディとして動画を見せるタイミングや、リアクションペーパーへの記入のタイミングは教室の空気を読みつつコントロールしています。
生活環境論	講義	大環1ABC	三宅 正弘	金4	6月16日	132名	S-35 6月16日 のみ 甲子園会館	身近な生活環境問題について考察を行い、我々の生活様式や考え方といったものが生活環境に密接に結びついていることを知る。また、生活中のモノやデキゴトをどのように意識して捉えているかといった環境観や価値観が生活環境問題を議論する際に重要となることを学習する。	生活環境にある疑問や課題を自ら発掘し、将来の研究において自ら問題設定ができる能力を養うことを目的とする。	生活環境とは、個人をとりまきそれと相互作用をもつ物的、精神的、人的世界の総体のことである。その構成要素間では、適合、協調、反発などの相互作用がおきる。この講義では、生活環境の構成要素を衣服、住居、都市、地域、地球というように段階的にとらえ、その相互関係を踏まえたうえで、おもに住居および都市環境の諸問題と、共生社会を目指した取り組みについて解説する。	本学の校舎である甲子園会館を教育で活用する方法を知ることができる。(そのためには、2時50分に南門出発・甲子園会館行きのバスに学生と一緒に乗車してくださいようお願いいたします。バスでの車窓の解説も重要視しています)
解剖生理学Ⅱ	講義	大食2A	蓬田 健太郎	火1	特になし	37名	S-45	「食と健康の関係」を理解するためには、ヒトの体の仕組みをきちんと理解することが必要となる。解剖生理学Ⅱでは、解剖生理学Ⅰに引き続き、正常な人体の構造と機能を理解し、どのように維持されているかを栄養との関係から考えられるようになることを目的とする。	解剖生理学Ⅰに引き続き、各論として、泌尿器系、運動器系、神経系、内分泌系、生殖器系、血液・免疫系の構造と機能を理解する。	HP上より配信した講義資料に従って、適宜、板書等により補足しながら講義を進める。	
情報科学への招待Ⅰ	講義	大情1CD	天野 憲樹	火3	6月20日	98名	MM-723	情報化社会は情報科学なしでは成立しえない。本科目の目的は情報科学における重要なトピックを学び、その本質と技術に対する深い理解を得ることである。 なお本科目は、高校教科情報科を教授するに足る基礎的知識および技能等を修得し、教職実践力と関連づけて理解することを一目的とする。	本科目の到達目標は情報科学における重要なトピックの本質と技術を理解し、情報科学に対する正しい理解と視点を獲得することである。 教職課程履修学生は、学修内容を当該の高校教科内容および教材に関連づけて主体的に探求する。	講義形式の授業であるが、IT機器等を用いて可能な限り双方向性のある授業を展開する。	聴衆応答システム(通称、クリッカー)を使った双方向型授業

FD推進委員会が推奨する授業公開科目一覧

科目名	授業形態	開講クラス	担当者名	曜日	参観が望ましい日程	受講者	教室	科目目的	到達目標	授業方法	参観のポイント
建築設計演習Ⅴ	演習	大築4年	柳沢、大井、宇野、三宗、上田	火 木 金 3、4限	6月20日 6月22日	16名 18名 11名	AS-120	福祉、医療、都市といったより複雑な諸条件を考慮しつつ、後期の卒業研究(卒業設計)、さらに大学院における高度な設計課題や実務実習を行う上で必要な建築・都市空間の計画、設計の手法を学ぶことを目的とする。そのため、福祉、医療のための建築空間の設計、および都市の計画、設計の演習を行う。	より複雑な諸条件が要求される建築、都市の設計への理解を通して、「真」「善」「美」を互いに総合する能力を養い、安全で、使い易く、美しい、真に人間的な住環境を創生する基礎的能力を習得する。	PBL(Problem-based learning: 問題解決型学習)。教員の説明、スタジオでの一対一の対話型演習、中間講評や講評会における発表や教員の講評を組み合わせる。なお第3課題は、海外からの短期留学生と合同で授業を行う予定であり、課題の説明資料等に英語の解説を付記する。	
合唱Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	実験 実習	大演1・2・3 大応1・2・3	大森 地塩	金4	6月23日 6月30日	136名	M-B1	声の重なりが作る奇跡に耳を傾け、合唱の魅力を味わうとともに、全員で一つの音楽をつくる喜びを感じ、表現したいイメージをふくらませ豊かにする。	声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して表現を工夫しながら合わせて歌うこと。また、社会で協調できる能力の育成を目標にする。	発声、歌唱テクニックの習得。ソプラノ、メゾソプラノ、アルト、もしくは、ソプラノ、アルトの各声部を読譜し合唱する実技授業。	
医薬品の開発Ⅰ	講義	新薬4AB 新薬4CD	岡村 昇	月 1・2	特になし	109名 104名	P5-341 P5-342	薬剤師として医薬品開発と生産に参画できるようにするために、医薬品開発の各プロセスについて基本的知識を習得する。	1) 医薬品開発の計画、探索、非臨床試験、臨床試験、承認申請、市販後調査などについて、実施概要、関連法規を説明できる。 2) 代表的な薬害について原因、対策について説明できる。 3) バイオ医薬品やゲノム情報を利用した創薬について説明できる。	講義型授業	
有機化学Ⅰ	講義	水1:新薬1B 金2:新薬1C	西村 奏咲	水1 金2	7月12日 7月14日	62名 61名	P3-11 P5-332 P5-341	薬学の基礎である有機化合物(医薬品や生理活性化合物)の性質や反応性を理解するために必要となる、基本的な「有機化学の知識」を修得することを目的としている。	1) 代表的な脂肪族化合物を IUPAC 命名法と慣用名を用いて命名することができる。 2) オクテット則、形式電荷に配慮して、有機化合物のルイス構造式を書くことができる。 3) 有機化合物の共鳴について、共鳴構造式を示して説明することができる。 4) 原子軌道と電子配置について説明できる。 5) ルイスの酸・塩基を定義することができる。 6) プレーンステッド・ローリーの酸・塩基の酸性度・塩基性を、pKaを用いて説明することができる。 7) R-S 規則による立体配置を説明することができる。 8) アルカンやシクロアルカンの立体配座について説明できる。 9) 立体化学に関する専門用語、エナンチオマー、ジアステレオマー、光学活性体とラセミ体、メソ化合物、エナンチオマー過剰率、について説明することができる。 10) 求核置換反応(SN1反応とSN2反)と脱離反応(E1反応とE2反応)について概説でき、その反応機構と立体化学を説明できる。	講義型授業を主体とするが、重要な問題について質疑を行う双方向授業を取り入れ、8、9回目と最終回には知識のまとめを目的とする演習、小テスト、総合討論、質疑応答を行う。	・講義開始冒頭の15～20分間を使用し、前回講義内容の確認試験および解説を行うことで、各学生の理解度の確認および知識の定着を図る。 ・学生の考える力を伸ばすために演習を多用し、双方向型の講義を行う。
母性看護学Ⅱ	演習	大護3AB	本間・町浦 谷郷・宇治丸	金3	特になし	86名	N-101 N-201	この科目は、周産期(妊娠・分娩・産褥期)の女性、新生児とその家族に対する看護を実践するために、母性看護学概論、母性看護学Ⅰ、その他の関連科目で習得した知識・技術を統合し、看護計画を立案する能力を養うことを目的としている。	1. 対象(周産期の女性、新生児および家族)の健康状態をアセスメントするために必要な知識、技術を述べることができる。 2. 対象の健康状態を適切にアセスメントできる。 3. アセスメントに基づき、対象の健康増進のために必要な看護ケアを計画することができる。 4. グループワーク(GW)ではメンバーと協力して取り組み、課題を完成することができる。	講義、グループワーク、ケース・スタディ、看護技術演習を組み合わせ授業を進める。	
アウシュビッツ 戦争と女性	講義	共通教育	河内 鏡太郎	月2	7月3日	199名	MM-101	戦争に対する関心は1昨年の「戦後70年」を機に高まりを見せ、16年度後期の受講希望者は800人に近づいた。学生が、これまで学んできた「戦争」は年表や地名・人名を記憶する「現代史」の一部であった。その時代を生きた人々の息遣いを感じる教育に巡り合ってきた。たしかに戦争体験者は減っていく一方である。戦争遺跡も消えている。戦争を可視化できない時代になっている。しかし、若者の関心は薄れるばかりだろうか。人間の歴史として位置付ければ、きつと興味を待つはずである。この授業は、ここに力点を置く。第二次大戦の最大の惨禍とされるアウシュビッツとヒロシマ、そしてわが国で唯一戦場となった沖縄。兵士ではない女性たちにも容赦なく悲劇は襲った。新聞記者としてその場に立ち、膨大な証言と遺品に向き合ってきた。伝えるべき事実は今も存在する。きつと初めて知ることが多いだろう。しかし、この講義に登場するのはすべて、みなさんと年齢の変わらない女性ばかりだ。身近に感じることができる、と考え「戦争と女性」をキーワードにした。戦争遺跡の保存、証言者からの継承など、新しい試みを織り交ぜる。現代の戦争にも触れる。映像、写真を駆使し、遺品や遺書も数多く登場させる。	「戦争はいけない」。それは小学生の感想である。大学生ならそこから一歩踏み出さなくてはならない。目を背けていては何も生まれない。向き合うことからはじめよう。酷い事実や映像も出てくるが、これまでも受講した多くの学生が凝視してきた。ポーランドのアウシュビッツを訪問した学生もこれまでに9人いる。広島・長崎、沖縄に行き、授業で学んだ戦争を現地でも体験した学生も多い。このように生まれた関心を「行動」にまで高めることは大事なことである。戦争を考える場は数多くある。「火垂るの墓」もここ西宮が舞台だ。母となって子供たちに問われてもたじろがないぐらいの知識は身につけてみよう。この授業を通じて、祖父母の戦争体験を聞くようになった学生たちも多い。自宅に持ち帰った授業資料をもとに家族と語り合うという人も。戦争を遠い世界の出来事と思わないようになること。それを目標にしよう。「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」という言葉がある。その意味を確かめる機会にもなる。	わかりやすく」に力点を置く。映像や文学などの記録を活用する。毎週、授業の内容について「コミュニケーションシート」(CS)に記入させて理解度を確認。採点、添削をして翌週に返却するとともに、次回授業で詳細に紹介、受講者と共有する。同時に受講者からの疑問、提案を授業に速やかに反映させ、双方向授業、課題発見を意識する。	ジャーナリストでもある担当者が「戦争を伝える」授業 アクティブラーニングという形態は取らないが学生の集中度が非常に高い授業である。